



学校だより

# 伸びゆく子

令和元年5月31日  
横浜市立中沢小学校  
6月号

## 中沢の人・自然・まちの学びの可能性

副校長 柴田 耕治

5月25日（土）、地域防災拠点の運営委員会終了後、二俣川にある旭区民文化センター サンハートに立ち寄りました。この日に開催される「旭区制50周年あさひ茶花道展 いけ花展」に、中沢小学校の子ども数名が、地域の方からのお誘いに応じて参加しているという話を聞いていたのです。私自身、「いけ花展」なるものに足を運ぶことは、初めてのこと。会場に入ると、なんとそこには特別の展示コーナーがあり、実に見事な作品が並んでいるではありませんか。

私の後から会場に来られた一般の方々も、必ずその展示の前で立ち止まり、口々に賞賛の声を漏らしていました。

私を案内してくださった華道の先生も、

「わたしたちが何も言わなくても、子どもたちは自分でどんどん花材を選んでいたのよ。」

「見ていたとき、『あら、そんなに短く切っちゃって、どうするのかしら』って思いましたが、ここにこんなふうには上手に生かされていて…、子どもってすごいわねえ。」

などと大変驚いた様子でした。子どもたちも、自分の挑戦したことがこのように評価され、とてもよい経験になったことでしょう。

また、大人の作品の中には、私の知る「いけ花」の概念を越えた壮大なものもありました。それは、横浜の中でも最大級の面積をもつ「大池公園」の景色をイメージして表現されたものでした。作者は、今回、中沢小学校の子どもたちをお誘いいただき、出品の機会に導いてくださった地域の方です。お話を伺うと、そこに使われた花材は、ご自宅の庭のアジサイやサツキ、中沢小学区のニュータウン緑地のスギの枝だと分かりました。さらに、その方の旦那様はニュータウン緑地の愛護会の副会長さんでした。

実は、5月14日（火）の朝会で、地域の緑地や花壇の様子をスライドで紹介しながら、「こういう場所には必ず人がかかわっています。そこには人の思いがこめられています。」という話をしていたのです。まさかこのような場所で、出会うとは！何という不思議な「縁」なのだろうと驚きました。子どもたちのお陰で、中沢の地域の自然や人がますます特別な意味を持つものとして見えてきました。



▲ 学区の小さな緑地の豊かな自然

中沢のまちには、あちこちに「花壇」「花の庭」「公園」「緑地」「並木」「雑木林」などの自然がたくさんあります。子どもたちの目に、それらはどのように映っているのでしょうか。そのほかにも、子どもたちがこのまちで当たり前に見過ごしているもの・ことの中には、学習材として価値あるものがたくさんあるはずです。

子どもたちがこのまちに自らかわり、教科書や参考書にないことを体験的・発見的に学ぶことは、自分たちならではの学びを創造した喜びや支えてくれた方への感謝、そして、自分たちのふるさとへの愛着を生むかも知れません。大切にしたいものです。

また、ニュータウン緑地の愛護会の副会長をされている方は、こうもおっしゃっていました。「どの組織も多くは高齢化が進んでいましてね。後継者がいないのは、大きな悩みなんです。」



▲ いけ花展に飾られた児童の作品